

令和元年東日本台風被災農地の復興に向けた担い手確保

対象者 竹谷地区基盤整備推進委員会 20人

現状と課題

- 丸森町竹谷地区は、台風により地区全体が甚大に被災し、令和2年はほ場の復旧工事を待ちながら、翌年の営農再開に備えた。
- 令和3年春に一部農地が復旧し、水稻の作付けを開始したが、復旧初年目での水稻の安定生産に不安があった。
- かんがい設備の復旧が遅れた区域では、転作対応としたが、湿田であるため作付品目の選定等に苦慮していた。
- 台風以前より、竹谷地区基盤整備推進委員会を設立し、農地整備事業への取り組みを進めており、被災後、転作組合を設立し、担い手法人の設立を目指した活動が開始された。
- 地区の農業者は高齢化しており、台風被災を機に委託要望がさらに増えている。一方、組合委員所有の機械・施設が少なく、人員の確保に加えて、機械・施設の整備も課題になっている。



降雨後のほ場の様子。排水不良が著しい。

今年度の取組

1 復旧水田の水稻安定栽培

- 復旧工事後の水田の土壌理化学性の分析に基づいた栽培支援
- 地下茎雑草対策支援

2 用水確保できないほ場における作物の栽培支援

- 土壌理化学性の分析やドローンを活用した排水性調査に基づいた作付圃場の選定支援
- 農地の条件に合わせた作付品目の選定支援
- 転作作物（そば、ブロッコリー等）の栽培技術支援

3 担い手の確保支援

- 生産者リーダー等との交流からの人材の掘り起し
- 将来ビジョン作成支援



ほ場内に繁茂する地下茎雑草



ブロッコリー作付に取組む

活動の成果

1 復旧水田の水稲安定栽培

- 令和3年春に復旧したほ場に水稲が2年ぶりに栽培され、施肥管理や病虫害雑草防除等の指導に尽力した結果、約480kg/10aの確保に貢献できた。
- 作付け前には地下茎雑草の繁茂が確認されたが、栽培前及び収穫後の対策指導を行い、栽培管理を支援した。



2年ぶりの米の収穫

2 用水確保できないほ場における作物の栽培支援

- 土壌分析や農業・園芸総合研究所の協力を得て、ドローンを活用した土壌表面水分を調査し、転作作物の作付支援を行った。
- 土壌分析データ等を基に、農地や地域の条件にあった品目選定や栽培技術支援を行った結果、16.5haに「ブロッコリー」、「そば」、「牧草」が栽培され、天候不順の中、全ての作物が収穫につながった。特にブロッコリー栽培に意欲があり、次年度は春秋2作に取り組む予定である。
- 水稲中心の地域であるが、営農の将来を見据え転作作物として、野菜の作付拡大が検討されている。



牧草 14.3 ha



ブロッコリー 0.4 ha



令和2年度の作付けマップ



水稲 14.5 ha (組合分)



そば 1.8 ha

3 担い手の確保支援

- 丸森中央集団転作組合員との会議等を重ね、担い手候補者の掘り起しを行ったが、明確になっていない。組合員が参加して協力しながら、栽培作業する中で組織活動する姿勢が少しずつ見られることから、令和4年度には、担い手候補が明確になると期待できる。
- 転作組合が作成した将来ビジョンに助言を行い、農地整備事業の受託計画申請が行われ、令和4年度には受託調査が開始される見込みである。

残された課題と今後の対応

- 令和4年春に新たに約5haの農地が復旧する予定であり、転作組合の耕作面積は約30haとなる見込みである。
- 復旧初年目及び2年目水田での水稲の安定生産に向けて継続した技術支援が必要である。また、水稲の作付面積が拡大するため、作業の効率化についても支援していく。
- 野菜については、復旧農地における品目の選定を支援する。また、安定生産を目指して、土壌分析等に基づいた肥培管理、排水対策等、安定生産技術支援を行い、野菜栽培の定着を促す。
- 担い手候補が明確化されていないため、担い手の掘り起しを継続して行き、地域の担い手としての意識の醸成を図る。また、法人設立に向けた動きについても助言していく。